

古代石見の謎 ―江津の統一新羅土器―

古八幡付近遺跡（江津市）、調査年：1998（平成10）年

東森 晋

平成10年の冬、私は2年間担当した江津道路発掘調査の大詰めを迎えていました。この時発掘調査を行っていたのは、江津市敬川町にある古八幡付近遺跡です。初めに400㎡の予定だった調査面積は、弥生時代の環壕集落や横穴式石室を持つ古墳群、中世の集落など、調査前の予想を大きく上回る発見によって三度拡張し、最終的に7600㎡になっていました。

発掘調査の出土品は、現場事務所で水洗いし、乾燥のため古新聞の上に並べられます。この頃は4月から始まった調査で疲労困憊でしたが、夕方に現場から戻り様々な出土品を確認するのは毎日の楽しみでした。

ある日いつものように並べられた遺物を見ていた私の目は、ひとつの土器に釘付けになりました。写真1下の破片は、一見よくある須恵器（登り窯で焼成した硬質な土器）ですが、表面にイカゲソのような文様があります。一緒に出土品を見ていた江津市の職員に、へんな須恵器があると伝えたところ、「こっちの方がすごいよ」と言ってみせられたのが、写真1上の破片です。すると、その場にいた先輩調査員が、「なぜ？これが？ここに！??でもどう見ても統一新羅だよな～」と興奮し、その土器について語り始めました。これが本州日本海側で初となる統一新羅土器を確認した瞬間で、実は採用3年目の私にはその意義がよく分からなかったのですが、普段非常に寡黙な先輩の見たことの

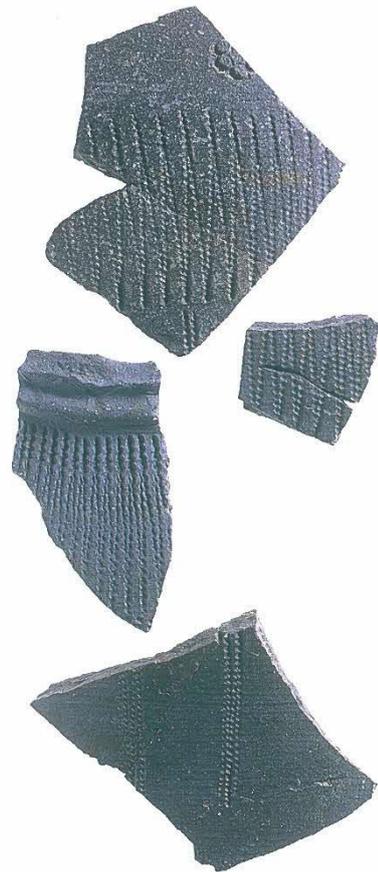


写真1 統一新羅土器

（撮影：牛島 茂氏）

ない興奮した姿に、たいへんなものが出土したことを認識しました。

古八幡付近遺跡最後の調査となる 8 区では、日本海に向かって伸びる丘陵上で、整然と並ぶ掘立柱建物の跡など古代の遺構や遺物が多数確認されました。丘陵西側斜面で出土した統一新羅土器の破片 4 点は、いっしょに出土した地元の土器の年代から、8 世紀に朝鮮半島の新羅で製作されたものと考えられます。いずれも壺型の容器で、このうち写真 1 の上・右・下の 3 点は、同じ土器の破片で、深い胴を持つ「瓶（へい）」とみられます。肩は多弁花文、胴は上下 2 段の縦長連続文で飾られており、同様の土器の出土例は平城京しかありません。写真 1 左の破片は長い頸と扁平な胴が特徴的な「長頸壺」の肩です。

国内では、8 世紀代の統一新羅土器が出土する遺跡は、北部九州と近畿の都城や官衙遺跡、寺院跡にほぼ限定され、そのほかには朝鮮半島の人に移住した関東の集落遺跡などがわずかに知られるほどです。古八幡付近遺跡では、統一新羅土器のなかでも、小型の蓋坏ではなく、「瓶」や「長頸壺」というやや大きめの貯蔵器種が 2 個体確認された点がとても重要で



写真 2 古八幡付近遺跡 8 区全景

す。この土器のポイントは、派手に飾られた外見だけでなく、中身にもあります。当時の文書から薬や顔料などの貴重品が、この土器で遙々朝鮮半島からもたらされたと考えられるのです。このことから、日本海側独自の交流を示唆する貴重な発見として注目されました。

埋文センターが担う、開発事業にともなう行政発掘では、狙って掘る重要遺跡の学術調査と異なり、それまで全く注目されていなかった地域で予想外の発見もあります。ひとつの発見によって地域の歴史観が変わっていく面白さは、行政発掘の醍醐味です。石見古代史上の大発見と日本海交流の謎を残した統一新羅土器の発見は、その典型例と言えるでしょう。

(島根県古代文化センター専門研究員)



写真3 古八幡付近遺跡調査状況